

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | D 蓋用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | G 使用方法(誤使用のおそれ) | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | 用去用量 | 効能効果 | |
|---------------|---|--|--------------|-----------------|--------------------------|-----------------|---------------------------------------|---------------------------------|-----------------------|--|---------------|--|---|
| 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化 | 効能効果 |
| 局所麻酔成分 | ベルカミン、 表面麻酔類似と考え使用 | 併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 振戦、痙攣等 (頻度不明) | ショック(頻度 不明) | 頻度不明(眠 気、不安、興 奮、霧視、眩 暈、悪心・嘔 吐等) | 頻度不明(過 敏症) | 本人又は両親、兄 弟に気管支喘息、 発疹、蕁麻疹等の アレルギー反応を 起こしやすい体質。 高齢者、妊婦又は 妊娠している可能 性のある婦人。 | 仙膏麻酔、伝 達麻酔、浸潤 麻酔、表面麻 酔、歯科領域 における伝達 麻酔・浸潤麻 酔 |
| 塩酸シブカイ ン | 感覚・求心神 経繊維のNa+ チャネルを遮 断することにより 局所麻酔作用を 発現する。効力、 持続性、毒性い ずれも最大級の 局所麻酔薬であ るが、より効力を 強めるために局 所鎮痛以外の目 的にはエビネフ リンを添加して 用いる。 | | | | | | 本剤に対し過敏症 の既往歴 | | | 使用に際し、目的 濃度の水性注射液 または水性液とし て使用する。た だし、年齢、麻酔 領域、部位、組 織、症状、体質 により適宜増減 する。 仙膏麻酔:0.05 ~0.1%注射液 にエビネフリン を添加したもの を用い、通常成 人10~30mgを 使用する。 伝達麻酔(基準 最高用量:1回 40mg):0.05 ~0.1%注射液 にエビネフリン を添加したもの を用い、通常成 人3~40mgを 使用する。 浸潤麻酔(基準 最高用量:1回 40mg):0.05 ~0.1%注射液 にエビネフリン を添加したもの を用い、通常成 人1~40mgを 使用する。 表面麻酔:耳鼻 咽喉科領域の 粘膜麻酔には、 1~2%液にエビ ネフリンを添 加したものを用 い、噴霧または 塗布する。眼科 領域の麻酔に は、0.05~0.1 %液にエビネフ リンを添加した ものを用い、通 常成人には1 ~5滴を点眼す る。尿道粘膜麻 酔には、0.1% 液にエビネフリ ンを添加したも のを用い、通常 成人男子10~ 20mg、女子3~ 7mgを使用す る。膀胱粘膜麻 酔には、0.025 ~0.05%液に エビネフリンを 添加したもの を用い、通常成 人10~20mg を使用する。局 所鎮痛には、0.0 25~0.05%液 を用い、適量 を使用する。 歯科領域麻酔: 0.1%注射液 にエビネフリン を添加したもの を用い、伝達麻 酔・浸潤麻酔に は通常成人1 ~2mgを使用す る。 | | | |

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ | D 濫用のお それ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | G 使用方法(誤使用のおそれ) | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | 用法用量 | 効能効果 | | | |
|---------------|--|---|--------------|------------------|-----------------------------|----------------------------|---------------------------------------|-------------------------------------|---|---|-----------------|---|-------------------------|--|------|
| 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | 重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 換るおそれ) | | | 使用方法(誤使用のおそれ) | スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化 | |
| | | 併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | | | | 使用量に上 限があるもの | 過量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被 害のおそれ | | |
| 局所麻酔成分 | リドカイン キシロカイン液「4%」:塩酸リドカイン表面麻酔に類似のため使用 | 神経膜のナトリウムチャネルをブロックし、神経における活動電位の伝導を可逆的に抑制し、知覚神経及び運動神経を遮断する局所麻酔薬である。表面・浸潤・伝達麻酔効果は、塩酸プロカインよりも強く、作用持続時間は塩酸プロカインよりも長い。 | | 意識障害、痙攣、痙攣(痙攣不明) | ショック(痙攣不明) | 痙攣不明(眼瞼、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐) | 痙攣不明(過敏症) | 本剤の成分又はアミド型局所麻酔薬に対し過敏症の既往歴。 | 高齢者又は全身状態が不良。心刺激伝導障害。重症の肝機能障害又は腎機能障害。幼児。妊婦又は妊娠している可能性のある婦人。 | | | 過量投与で中毒症状が現れる。症状として中枢神経系(不安、興奮、意識消失、全身痙攣など)、心血管系(血圧低下、徐脈、循環虚脱など)が現れる。 眼科(点眼)用として使用しないこと。注射用として使用しない。 | | 塩酸リドカインとして、通常成人では80~200mg(2~5mL)を使用する。なお、年齢、麻酔領域、部位、組織、体質により適宜増減する。 幼児(特に3歳以下)では低用量から投与を開始。 | 表面麻酔 |

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | 用法用量 | 効能効果 |
|------------------|--------------|------------------------|--|------|-----------------|--------------------------|-----------------------------------|--------------------------|---------------|---------------------------------------|---------------------------------|------------------------|---|-----------------|-------------------------------------|-------------------------|--------------------------------|--|--------------------------------------|
| | 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化 | | |
| | | | 併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | | | | | | 使用量に上 限があるもの | 過量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被 害のおそれ | | | |
| 抗 炎 成 分 | グリチルレチ ン酸 | デルマクリン 軟膏 | グリチルレチ ン酸は急性 炎症に対する 抗炎症作用 (浮腫抑制- ラット、肉芽 腫抑制-ラット、抗紅斑-モ ルモット)を有 する。抗炎症 作用は主成 分であるグリ チルレチン酸 の化学構造 がハイドロ コチゾンの 化学構造に 類似している ところによると 推定される。 | | | | | 5%以上又は 頻度不明(過 敏症) | | | | | | | | | | 過等、症状により適量を1 日数回患部に塗布または 塗擦する。 | 湿疹、皮膚そう 痒症、神経皮 膚炎 |
| 抗 炎 成 分 | サリチル酸メ チル | サリチル酸 メチル「ミヤ ザワ」 | | | | | 大量使用・頭 痛、悪心・嘔 吐、食欲不振 、頻脈 | 過敏症 | | 本剤に対し過敏症 の既往歴 | | | 眼には使用 しない | | 大量使用による 頭痛、悪心・嘔 吐、食欲不振、 頻脈 | | | 5%又はそれ以上の濃度 の液剤、軟膏剤又はリニメ ント剤として皮膚局所に塗 布する | 下記における 鎮痛・消炎 関節痛、筋肉 痛、打撲、捻挫 |

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ | D 濫用のお それ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | G 使用方法(誤使用のおそれ) | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | 用法用量 | 効能効果 | | | |
|---------------|--------------|--|--------------|-----------------|-----------------------------|-----------------|---------------------------------------|-------------------------------------|-------------------------------|---|-----------------|------------------------------|-------------------------|--|--|
| 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化 | 用法用量 | 効能効果 | |
| 殺菌成分 | フェノールを 使用 | 併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 頻度不明(過 敏症) | ・擴張皮膚及び粘 膜(吸収され中毒 症状発現) | | 使用量に上 限があるもの | 過量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被害 のおそれ | 効能・効果 用法・用量(本 品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェ ノールとして1.5~2%溶液 を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・ 家具・器具・物品などの消 毒:フェノールとして2~ 5%溶液を用いる。(20~ 50倍) 排泄物の消毒:フェノール として3~5%溶液を用い る。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒 痒疹(小児ストロフルスを 含む)、じん麻疹、虫さされ 液: フェノールとして1~2%溶 液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~ 5%軟膏を用いる。(20~ 50倍) | |
| 殺菌成分 | フェノールを 使用 | 本剤は、使用 濃度において グラム陽性 菌、グラム陰 性菌、結核菌 には有効であ るが、芽胞 (炭疽菌、破 傷菌等)及び大部分の ウイルスに対 する効果は期 待できない。 | | | | | | | | | 使用量に上 限があるもの | 過量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被害 のおそれ | 効能・効果 用法・用量(本 品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェ ノールとして1.5~2%溶液 を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・ 家具・器具・物品などの消 毒:フェノールとして2~ 5%溶液を用いる。(20~ 50倍) 排泄物の消毒:フェノール として3~5%溶液を用い る。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒 痒疹(小児ストロフルスを 含む)、じん麻疹、虫さされ 液: フェノールとして1~2%溶 液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~ 5%軟膏を用いる。(20~ 50倍) | |

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | B 相互作用 | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ | D 薬用のお それ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ) | G 使用方法(誤使用のおそれ) | H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化 | | | | |
|---------------|---|--|--------------|-----------------|-----------------------------|--------------------------|---------------------------------------|--|--|--------------------------------|---|-----------------|---|---|
| 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ | 薬理に基づく 習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化 |
| 殺菌成分 | 薬理作用 | 併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 薬理・毒性に 基づくもの | 特異体質・ア レルギー等 によるもの | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ) | 症状の悪化 につながるお それ | 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ) | 使用量に上 限があるもの | 過量使用・誤使 用のおそれ | 長期使用に よる健康被害 のおそれ |
| 塩酸クロルヘキシジン | <p>グルコン酸塩として5%ピピテン液</p> <p>抗菌作用(in vitro試験) ・広範囲の微生物に作用し、グラム陽性菌には低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。 ・グラム陰性菌には比較的濃度で殺菌作用を示すが、グラム陽性菌に比べ抗菌力に幅がみられる。 ・芽胞形成菌の芽胞には効力を示さない。 ・結核菌に対して水溶液では殺菌作用を示し、アルコール溶液では迅速な殺菌作用を示す。 ・真菌類の多くに抗菌力を示すが、一般的に細菌類よりも抗菌力は弱い。 ・ウイルスに対する効力は確定していない。 作用機序 作用機序は十分には解明されていないが、比較的低濃度では細菌の細胞膜に障害を与え、細胞質成分の不可逆的漏出や酵素阻害を起こし、比較的高濃度では細胞内の蛋白質や核酸の沈着を起こすことが報告されている。</p> | | | ショック(0.1%未満) | | 0.1%未満(過敏症) | | <p>・クロルヘキシジン製剤過敏症の既往歴 ・脳、脊髄、耳(内耳、中耳、外耳)(聴神経及び中枢神経)に対して直接使用した場合は、痙攣、神経障害を来すことがある。 ・膈、膀胱、口腔等の粘膜面(ショック症状の発現が報告されている) ・産婦人科用(膈・外陰部の消毒等)、泌尿器科用(膀胱・外性器の消毒等)には使用しない。 ・眼</p> | <p>・薬物過敏症の既往歴 ・喘息等のアレルギー疾患の既往歴、家族歴</p> | | <p>・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・外用にのみ使用する。 ・眼に入らないように注意する。</p> | | <p>・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・外用にのみ使用する。 ・眼に入らないように注意する。</p> | <p>本品は下記の濃度(グルコン酸クロルヘキシジンとして)に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。 効能・効果 用法・用量 (使用例) ① 手指・皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(30秒以上) 汚染時:0.5%水溶液(30秒以上)) ② 手術部位(手術野)の皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (0.5%エタノール溶液) ③ 皮膚の創傷部位の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (0.05%水溶液) ④ 医療用具の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(10~30分))</p> |

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

| リスクの程度 の評価 | A 薬理作用 | | B 相互作用 | | C 重篤な副作用のおそれ | | C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | D 濫用のおそれ | E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ) | F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ) | | G 使用方法(誤使用のおそれ) | | | H スイッチ化等に伴う使用環境の変化 | 用法用量 | 効能効果 | |
|---------------|--------|-------------|------------------------------|------|--------------|------------------|-------------------------|------------------|-----------|---------------------------------------|-----------------------------|---------------|-----------------------------|---------------|---|---|------|-------------------|--|
| | 評価の視点 | 薬理作用 | 相互作用 | | 重篤な副作用のおそれ | | 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ | | 薬理に基づく習慣性 | 適応禁忌 | 慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ) | 症状の悪化につながるおそれ | 適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ) | 使用方法(誤使用のおそれ) | | | | | スイッチ化等に伴う使用環境の変化 |
| | | | 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) | 併用注意 | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | 薬理・毒性に基づくもの | 特異体質・アレルギー等によるもの | | | | | | 使用量に上限があるもの | 適量使用・誤使用のおそれ | 長期使用による健康被害のおそれ | | | |
| 局所刺激成分 | アンモニア | アンモニア水「エビス」 | | | | | 頻度不明(局所刺激、発赤、灼熱感) | 頻度不明(過敏症) | | | | | 眼又は眼の周囲に使用しない | | 希釈して使用しない 原液または濃厚液の蒸気を吸入すると、呼吸器等の粘膜を刺激し、喉頭痙攣、肺・気管支に障害を起こすことがある | 刺激作用を有するので、長期間または同一部位に反復使用しない 湿布等によるたる皮膚との接触を避ける | | ②2~10倍に希釈し、塗布する。 | ①経口皮アンモニア・ウイキョウ糖の調剤原料に用いる。 ②外用虫さされ |
| 清涼化成分 | カンフル | カンフル精 | 局所刺激作用を有し、皮膚に塗布すると発赤又は冷感を生じる | | | | 頻度不明(過敏症) | | | | | | | | 湿潤面へは使用しない 眼又は眼の周囲には使用しない | | | 患部に適量を塗布あるいは塗擦する。 | 下記疾患における局所刺激、血行の改善、消炎、鎮痛、鎮痒、筋肉痛、挫傷、打撲、捻挫、凍傷(第1度)、凍瘡、皮膚そう痒症 |
| | メントール | 内服のみ | | | | | | | | | | | | | | | | | |